

TAPP で難渋した、鼠径部再発膀胱ヘルニアの一例

総合南東北病院外科

高野祥直、益子隆太郎、鈴木伸康、片方雅紀、鈴木優也、府野琢実

症例は 74 歳男性、尿漏れで泌尿器科通院中。吃逆の原因精査目的に施行された CT で右鼠径部の膨隆と嚢胞状陰影を認めたため膀胱ヘルニアと診断され当科受診。本人に手術希望なく経過観察となった。5 か月後、鼠径部痛を主訴に救急外来を受診、ヘルニアによる痛みと診断され手術目的に入院。既往歴に 20 歳代に組織法合法による右鼠径ヘルニア修復術。両側内頸動脈狭窄と糖尿病、冠動脈狭窄があり、ヘパリンブリッジを行いながら TAPP 法で手術。ヘルニアタイプは再発、M2 型の膀胱ヘルニアと診断された。膀胱と周囲組織との癒着が高度で剥離に難渋した。ビデオを見返してみると、膀胱壁と誤認するものが実は偽ヘルニア嚢である可能性があり、膀胱壁と誤認することで脂肪組織を鈍的に剥離したことが手術を難しくした要因と考えられた。M 型ヘルニアで膀胱損傷を来たさないためには、脂肪に切り込まないことが重要と改めて認識した症例だった。